

先週もお話ししましたように、旧約聖書とはバビロン捕囚下の同胞たちに対して、慰め・励まし・希望を語るためだけに編集されてまいりました。旧約正典は39巻、偽典・外典、さらに失われた物まで加えるとかかなりな数にのぼります。これらの多くが多種多様であった捕囚下の諸部族に向かって「共通の過去」を築きあげるためだけに用いられています。それは「わたしはどこから来て、どこへ行こうとしているのか」、つまり「わたしとは誰なのか」という新しい提案に貫かれているのです。その提案とは出エジプト、すなわち共通の出発点の確認作業なのです。

本日の箇所はモーセの召命記事です。この記事は出エジプト記に二箇所あります。一つは第3章です。そこに描かれるモーセはミディアンの祭司エトロの娘ツィポラと結婚して子どもまでもうけて羊飼いを生業としていました。そんな平穏な日々の最中に、シナイ山で「燃え尽きない柴」の中から語りかけられるヤハウエの招きが記されてゆきます。エジプトで偶発的とはいえ人殺しをしてこの地に逃げ込んだモーセでしたが、同胞を見捨てて自分ばかりが安寧な生活をおくることへの良心の呵責があったということでしょう。

実はわたしたちがよく知るこのモーセの召命記事とはJ資料とE資料から編集されています。それぞれ神の名をヤハウエ、エロヒームと呼ぶ頭文字から命名された資料集です。共同体の中に出エジプトの体験的伝承を持っていた部族の古いオリジナル伝承記事を合成・拡幅して採択したのです。これが一つ目の召命物語です。

二つ目の本日の物語はP資料です。これは祭司資料と言ひ、バビロン捕囚下に誕生した編集者集団です。ここに描かれるモーセの召命記事は3章とは大きく異なります。まず場所はミディアンではなく、エジプトです。つまりモーセはシナイ山には行っていないのです。ですからツイポラとも結婚してませんし、子どももおりません。

それでは何故P書記者たちはモーセをミディアンに行かせなかったのでしょうか。それはヤハウエが共同体以外の他民族に由来するという誤解を避けたかったからです。結婚させなかったのも外国人女性との婚姻関係は、バビロン捕囚下の共同体のアイデンティティーが脅かされるリスクをそこに見たからかと考えられます。こうしてPではモーセは生涯独身として扱われ、彼の系図は作成されませんでした。

旧約の記述にはこのように相矛盾する記事が並行して用いられることは珍しくありません。例えば創世記の天地創造は1章、2章と二つありますし、エデンの園にも木は2本(命の木・知恵の木)用意されていたりします。

P書記者が3章を削除しなかった理由とは多様化の選択かと考えます。召命の背景を末端枝葉化して、本来のテーマを押し出したのです。すなわち「わたしとは誰なのか」です。この問いに触れるためなら、そこに至る道を一本でも増やしたかったのでしょうか。

バビロン捕囚下に困苦する「わたし」とは、どこから来て誰と出会ったのかも分からない「無意味な存在ではない」ということの宣言なのです。神と出会うという表現は「わたし」の存在には必ず意味があるという認識の誕生なので

す。そして、その意味とはイエスの十字架と復活を通して「わたしは愛されている存在」の確認なのです。